

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	舟 橋 秀 晃
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>言語生活の拡張を志向する説明的文章学習指導の研究 —中学校カリキュラムの検討を中心として—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 間 瀬 茂 夫</p> <p>審査委員 教 授 山 元 隆 春</p> <p>審査委員 教 授 難 波 博 孝</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>国語の授業という枠組みにとどまらず、学習者の現在の日常的な言語生活を充実させること、あるいは将来にわたる言語生活を向上させる資質を身につけさせることは、国語科の本質的な目標である。本論文は、国語科における「読むこと」、中でも説明的文章領域のカリキュラムがどうあるべきかという問題について、主に中学校段階に焦点を当て、教科書教材の読解に閉じた「カプセル」化した学習指導から脱却し、学習者の言語生活の拡張を志向したカリキュラム論を構築することを目的とした論文である。</p> <p>その際、エンゲストロームの拡張的学習理論を学習観の基礎に据え、「読むこと」の学習を学習者の社会参加の過程としてとらえたいうえで、説明的文章指導における目標、教材、言語活動をどのように社会的な文脈に接続させるかということを中心に検討を行っている。論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、先行研究を検討している。国語科カリキュラム研究、説明的文章の学習指導実践における論理観、教科書外教材の位置の変遷について検討することを通して、説明的文章の読みの領域における国語科カリキュラムの研究課題を再設定した。</p> <p>第2章では、能力の発達論を展開している。説明的文章の読みを「文章の意味と意義・価値を理解し自己の考えを持つ能動的な読書行為」と規定し、そうした能力の発達の筋道を主にエンゲストロームの拡張的学習理論に求め、系統性を垂直次元と水平次元の二方向でとらえる枠組みを提示した。垂直次元は認識の深化過程、水平次元は社会的な文脈への接続と拡張としてとらえられた。</p> <p>第3章では、教材構成論を展開している。小中学校国語教科書の説明的文章教材が内包している系統性について、垂直次元、水平次元の両側面から分析を行った。教科書教材に、確定的事実から余地のある事実、新しい価値の提示へという垂直次元の系統性、文脈と切り離された個別的な事実から、社会的な文脈への接続という水平次元の系統性が、内包されていることが明らかになり、そうした系統性を生かす副教材のあり方が検討された。</p> <p>第4章では、学習活動構造論を展開している。教科書教材と教科書外教材を組みあわせた学習の展開を持つ授業実践例の収集、検討を通して、個人の文脈を優先した認識から客</p>			

観的、相対的な認識へと至る学習展開の構造，またそうした認識を可能にする教材の構成という観点から授業のモデル化を行った。

第5章では、カリキュラム・モデルの提示と検証を行っている。前章までを総合する形で、言語生活の拡張を志向する説明的文章の読みの中学校国語科カリキュラム・モデルを設計したうえで、そのモデルを自身の実践个体史に適用し、中学校3年間の説明的文章の読みのカリキュラムの具体像を描き出すと、そこには、特に中学校2年生段階の「理由づけ」の理解の学習において、実現できなかつたカリキュラム上の課題が見出された。そこで、それを修正するための授業を、教材構成、学習活動の構造の観点から構想し、実験授業として実施することで、その検証を行った。

終章では、以上の研究成果を総括している。

本論文は、次の4点で高く評価できる。

1. まずエンゲストロームの「拡張的学習」や「探究的学習」を国語科における学習構成理論として展開した点である。これらの理論は、我が国においておもに総合的な学習を構成する際の理論として用いられることが多かったが、国語科の「読むこと」の学習指導論の基本的な枠組みを構成する理論として展開し、実践に根ざした研究成果を得た点に意義を見出すことができる。
2. 次に、国語科には、学習者の言語生活の拡張を志向する学習論として、戦後発展的に受け継がれてきた国語科単元学習があるが、文章の論理の理解といった抽象性の高い能力を獲得させることを中心的な目標とした学習指導においては、単元学習の学習論が必ずしも有効に機能しなかつた面がある。本研究では、教科書教材と他のテキストとを関連させること、また、学習者を社会参加の文脈に置いた言語活動を仕組むことをカリキュラムとして構成することにより、単元学習という手法によらなくても、学習者の言語生活の拡張を実現する学習指導が可能であることを明らかにしたことに意義がある。
3. 三つ目に、読解指導と読書指導との連関という国語科の学習指導における解決しがたい実践課題に対して、教材構成や、言語活動を含めた単元構成という国語科カリキュラムの視点から、有益な示唆を与えた点である。教科書教材を対象として文章の論理を精緻に検討しながら関連するテキストと読み比べる、あるいは、社会的な文脈に参加しながら文章の論理を批判的に検討する。そうした学習指導のあり方を中学校の各学年の目標の段階性、系統性ととも示した点には意義がある。
4. 加えて、こうした研究に関して、一般教授学的学習理論、国語科学習指導論、先行する授業実践史、自身の実践个体史、実験授業を往還、融合させながら論を展開した点にも、今後の実践研究の可能性を切り開いたという点で意義が見出される。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成30年 2月15日